

離島におけるエコツーリズムの実践
Current Ecotourism Model in Aichi's remote Islands

藤森 憲臣*1 高松 一史*2 森田 武志*3

FUJIMORI Noriomi*1,*2,*3、TAKAMATSU Kazufumi*2、MORITA Takeshi*3

*1)星城大学,*2)伊勢・三河湾離島の螢探検隊,*3)名古屋大学

I. はじめに

大手旅行会社の企画は今日、近隣に位置する離島に「手軽に足を運ぶ島旅」の提案というより国内でも奄美大島及び沖縄本島及び離島(八重山や宮古、久米島等)やその他多くは海外企画になる等「遠方で長時間の移動を設定し、非日常の演出」をすることが狙いになる島旅提案が見受けられる。

これまでに、大手企画のメジャープランには度々参加してきた。メジャープランでは「時、場所、物・事」コンテンツは物語の筋書き通りの経験が出来る。対して、小さな島旅のマイナープランでは「時、場所、物・事、+人(自・他共)」で「+α」コンテンツを実感出来る大きな魅力がそこにはある。日本は5つの本島(北海道及び本州、四国、九州、沖縄本島)を中心に、その周辺に6847島の諸島及び群島として離島を多く持つ。

本調査では、名古屋を中心にする地域の誰もが存在程度は認知している愛知県管轄の離島「愛知3島(日間賀島及び篠島、佐久島)」をフィールドに開催しているエコツーリズムの実践について記述する。

II. 離島エコツーリズム(パイロット版)の概要

2015年6月に愛知県南知多町にて実施した離島エコツーリズム(パイロット版)を報告し、観光学の見知からその内容を紹介する。本ツアーは、2013年より毎年1回開催し、今回で3回目の実施となる。

「伊勢・三河湾離島の螢探検隊」が主催して実施した。ツアーガイドは現在、全国各地でホテル科昆虫の調査研究を行いながら、大学講師及びエコツーリズムの企画運営や人材育成に取り組む。メイン企画は、知多半島沖離島に分布するヒメボタル観察であったが、日程中の篠島ではすでに今年のヒメボタルの観察可能時期を過ぎており、ホテル観察は知多半島側の生息域で行い、篠島及び日間賀島2つの離島では、日中に島内散策(主に、ビーチコーミングを実施する目的)を行った。

ツアー参加者及び日程は、次の通りである。

【ツアー参加者(10名)】

- ・ F氏…名古屋大学大学院生命農学研究科
椋山女学園及び名古屋産業、星城大学の非常勤講師。主に、エコツーリズムを積極的に展開し、本ツアーの企画立案及び運営、ガイド。
- ・ O氏…名古屋市立大学大学院芸術工学研究科教授
その他、伊勢・三河湾離島の螢探検隊・分隊長。
- ・ T氏：大高緑地自然観察会・代表
- ・ Y氏：東邦ガス株式会社環境部

- ・ I 氏：大高緑地自然観察会・会員
- ・ S 氏：愛知東邦大学人間学部准教授
- ・ M 氏：名古屋産業大学事務職員
- ・ 学生参加：O さん、A さん、N さん(3 名)

【ツアー日程】

2015 年 6 月 6 日（土）

- 16:00 師崎地区に現地集合→ホテル観察地を明るいうちに踏査
- 22:00 ガイドによるホテル観察のレクチャー
- 22:30 師崎地区 3ヶ所(芋沢、山海、片名)でのヒメボタル観察

2015 年 6 月 7 日（日）

- 9:00 師崎港→移動(高速船)→日間賀島西港・島散策
- 12:00 日間賀西島→移動(高速船)→篠島港
- 13:00 民宿・喜久にて昼食(要予約)
- 14:00 ガイドによるビーチコーミングのレクチャー
- 14:30 篠島・島散策と鯨浜及び棚橋での宝探し(主に、タカラガイ類の貝殻)
- 17:00 篠島港→移動(高速船)→師崎港、その後現地解散

Ⅲ. 南知多町及び各離島について

愛知県南知多町：面積 38.37 km²、人口 20,549 人

知多半島先端に位置し、東に三河湾、南西は伊勢湾を配する。特に、師崎地区は半島最先端部にあり、同町の属する日間賀島及び篠島への高速船(名鉄)が就航。

歴史的には、東西に良好な漁場で三河湾と伊勢湾があるため漁業が発展し、江戸時代にはいと東西を行き来する回漕船の要所として発展した。

(1)師崎（もろざき）地区

沿岸部には漁港、内陸部に入ると水田及び果樹園などの農地、森林が広がる。

離島 2 島及び渥美半島先端・伊良湖岬への船ターミナルがあり、また多くの海産物販売店及び民宿がある。地域住民の日常生活及び観光客の姿が混在する地域。

(2)篠島(しのじま)：面積 0.94 km²、周囲 8.2km、人口 1,763 人。

伊勢神宮との関わりが古来より深く、「日本書紀」から倭姫命（やまとひめのみこと）一行が船で伊勢湾巡幸の途、篠島に寄港。御神領に定め荒御魂を祀った。島周辺では鯛が多く獲れ、御贄所設置。鯛を塩づけに調製したもの伊勢神宮へ奉納。

(3)日間賀島(ひまかじま)：面積 0.77 km²、周囲 6.6 km、人口 2,051 人。

漁獲品ではタコ及びフグが有名。島内各所にて関係するものを目にする。特にフグは全国でも有数の漁場で、伊勢湾口がトラフグの産卵場となっていることに加え、100 年以上の伝統があるフグの延縄漁が根付いている。

この地域で水揚げされたフグは消費量の多い大阪または下関へ水揚げされたが、約 20 年前からフグ料理を日間賀島の地料理として提供する取り組みが始まる。

観光地として「①海に囲まれていること、②離島が 2 島あること(近接して、他 1 島・佐久島が位置)」。海水浴場及び釣場が多く、海産物の他、温泉、江戸時代以降の名所旧跡な

どの観光資源にも恵まれる。近年は年間 350 万人前後の観光客が訪れる。

名鉄知多線、知多半島と日間賀島及び篠島、伊良湖岬を結ぶ高速船の営業があり、名古屋鉄道グループの資本投下により複合レジャー施設が運営される。

IV. 観光対象及び行為(引用文献【1】)

(1) ホタル観察(主に、ヒメボタル)

一般的に、ホタルは清流のある水辺にて観察されるイメージが強い。日本にて確認されているホタル科昆虫約 50 種。本州及び四国、九州でよく見られるものは約 10 種。さらに、その中で一般によく見られる幼虫期水生のものが、ゲンジボタル及びヘイケボタルの 2 種のみ。その他多くは、ヒメボタルをはじめとする陸生である。

今回、観察対象とした「ヒメボタル」は、東北(青森)から九州(鹿児島)まで。平地から高山地まで広く分布しており、生育環境も雑木林及び竹林、河川敷など多様である。

参加者には、暗くなってから訪れるホタル観察地点を、日没前の明るい時間に事前に歩いてもらうことで、物理場の状況把握をしてもらうよう現地案内した。

22 時過ぎ、ガイドから参加者に対しスライドを用いて約 30 分のホタル解説を行った。

その後、車輦に分乗して 3 ヶ所の観察場所を巡検する。観察地は、竹林及び雑木林、溜池周辺などで、観察場所に辿り着くまでに車がやっと 1 台通ることができるくらいの細い道を進む。到着して自動車のヘッドライトを消すと、目がなれるまではほとんど何も見えないくらいの暗闇で、人工的な光は全く見えない場所であった。

小型の懐中電灯を手渡される。足元が見えず不安な時は足元を時折照らしながら安全を確保して、それ以外はホタルの発光を邪魔しないよう消灯した状態で進むほうが良い。ガイドを先頭に、ペアになった参加者 2 名ごとに手をつなぎ、順番に順路を進むと、周辺でホタルの光を参加者が見つけ始めた。当初、一部の参加者のみに見えていたホタルが、歩みを進めるに連れて「あちらに見えた！こちらに見えた！」の音が聞かれるようになり、多くのホタルが群れて観察できる場所も見つかり始めた。

薄明るい夜空の下、観察路及び木々の形、参加者のシルエット程度しか見えない中、声のみを頼りにしたコミュニケーションを行う非日常を自然が演出。「不安の中で湧き上がる興奮のようなものを感じた！」と参加者より声があった。

無数のホタルの光の中からヒメボタルとは異なる発光を見つけ、また立ち止まる。各人、地面で光るその点を見つけ、手にしてみるとマドボタル幼虫である。これをサンプル管に入れたり、参加者の手に乗せるなどして姿及び形、発光を観察した。飛翔ピークの状況では無いものの、数え切れない数が飛翔する幻想的な風景を森の中に見ることが出来た。

また移動途中の水田脇であったが、参加学生が目立つほどでは無い微弱発光を車内から確認。下車して観察してみると、それはヘイケボタルであった。

ホタルを夢中に観察すること約 4 時間、26 時に目視及び捕獲しての観察が終了した。

(2) 離島散策(主に、ビーチコーミング(タカラガイ類の貝殻))

一般的に、タカラガイ類は海域における潮間帯で主に観察される。深いところでは水深約 10-50m まで生息。日本にて確認されるタカラガイ類は 88 種で、本州(青森以南)及び四国、九州、沖縄まで広く分布。海岸で通常に見られるのは約 10 種、また生息好適環境

を探せば約 40－50 種は簡単に見つけることが可能である。

タカラガイ類は、温帯(本州)ではメダカラ及びチャイロキヌタの 2 種、亜熱帯(南西諸島)ではハナビラダカラ及びキイロダカラの 2 種が優占種。また、温帯 - 亜熱帯を通して、ハツユキダカラ及びハナマルユキダカラの 2 種が、主に優占分布する傾向にある。

今回、観察対象としたタカラガイ類は、メダカラ及びチャイロキヌタ、ハツユキダカラ及びハナマルユキダカラの 4 種で、本州(主に、房総半島以南)から九州・沖縄まで広く分布している種。潮間帯－水深約 20m まで広く生息しており、その生育環境は多様。

① 日間賀島

「師崎港→日間賀島」へ渡る。日間賀島は小さな島であるため、徒歩でも短時間で沿岸を一周可能である。日間賀島西港へ上陸後、島内案内図を用いてガイドが日間賀島の概要及び本日のコース説明を行ってから、散策をスタートした。

島内を約半周するコース(西港→東港)で海岸沿いを歩いた。東港船着場で、次の篠島へ渡る船の時刻まで十二分な時間があることが判明。港隣のサンライズビーチで、漂着物を採集する「ビーチコーミング」を行った。多くの貝殻及びウミウシ、ヒトデ、クラゲ、などが観察出来たが、目的のタカラガイ類の採集は「0」であった。

② 篠島

「日間賀島→篠島」へ渡る。篠島も日間賀島同様、小さな島であり徒歩で沿岸を一周は可能である。しかし、島の南約半分は森林化し、アップダウンが激しいため周遊するには十分な時間及び体力が必要。篠島港へ上陸後、ここでも島内案内図を用いてガイドが篠島の概要及び本日のコース説明を行ってから、散策がスタートした。

まず、ガイドがホタル調査のため宿泊利用する民宿・喜久にて昼食(要予約)を摂る。

港から民宿までの途中で、「八王子社・神明神社 御遷宮作業所」の現場を見学。篠島は伊勢神宮とのつながりが強く、平成 25 年に行われた式年遷宮で下賜された木材によって 2 つの社は再生される準備が進む。

篠島で生まれ育った夫婦が民宿を営む。夫は素潜り漁師、主に妻が民宿を切り盛りする。食事の準備から最中に掛け、女将から島語りが提供された。

また、ガイドからは次に実施する宝探し(タカラガイ類)のため、タカラガイの図鑑及び実物を提示し、貝殻採集を主とするビーチコーミングのレクチャーを行った。その後、鯨浜(くじはま)及び棚橋(たなばし)へ移動。棚橋では、様々な種類のタカラガイを採集した。

以上、本ツアーの全日程はここで終了し、「篠島港→師崎港」へ戻り現地解散とした。参加者には、ビーチコーミングで採集した漂着物(主に、貝殻)を用いて簡単な工作を行う予定であったが、現地にて予定以上の時間が費やされてしまった関係で各々持ち帰ってからの制作が課題となった。

<運営上注意すべき事項>

- ・現地に詳しいガイドまたはコーディネータを準備する。
- ・野外活動保険への登録をする。
- ・救急搬送及び参加者の緊急連絡先(保護者等)を事前確認する。
- ・危険物及び危険生物に対する注意喚起を行う。
- ・ホタル観察(夜間)の場合、観察地点(林内)の明るさがお互いを確認できない程度に暗条件下に置かれる場合が発生する。特に、林内は暗条件になり遭難の恐れを考慮する必要がある。

ある。バディの設定及び逐次声掛け等を行うことで常に相互確認を行う。

- ・タカラガイ観察(昼間)の場合、観察地点(海岸)が段状及び急傾斜地である等降り立つことが困難で危険な場合がある。一般の人でも降りやすいスロープまたは階段等を事前に把握して現場では参加者に注意喚起を促し、安全な引率を行う。

V. 結論

今回実践した「離島におけるツーリズム」の概念を重視したエコツアーまたはエコツーリズムでは、ホテル観察及びビーチコーミングの2つのコンテンツを準備して提供し、好評を得た。本企画が一般に有効であることが証明されたと共に、短期的な旅程の中で参加者の満足度向上のためにはガイドがプロフェッショナルである重要性が再確認された。

VI. 引用文献

- 【1】森田武志ら：観光のオーセンティシティについての理論的枠組みの考察．名古屋産業大学(環境情報ビジネス学会)論集：25 - 38, 2015.